

## 【研究会抄録】

## 第16回島根乳腺疾患研究会

日 時：平成21年3月14日 (土) 14:00~17:30

会 場：ビッグハート出雲 1階 白のホール

島根県出雲市駅南町1-5

TEL: 0853-20-2888 FAX: 0853-30-0890

当番世話人：板倉 正幸 (島根大学医学部附属病院 乳腺内分泌外科)

## 1. 腺様嚢胞腺癌の1例

島根大学医学部消化器・総合外科

波里 瑤子, 三成 善光, 百留 美樹  
西 健, 百留 亮治, 久長 恒洋  
山本 徹, 比良 英司, 上田 修平  
板倉 正幸, 田中 恒夫

同 病理部

丸山理留敬

症例は61歳女性。2年前より左乳房腫瘍を自覚、健診にて異常を指摘され当院受診。左CA領域に1.5cm大の弾性硬の圧痛を伴う腫瘍を認めた。MMGでは左U領域にFADを認め、USで同部に低エコー領域を認めた。MRIでは早期より造影効果を受ける腫瘍で悪性が疑われた。針生検で篩状構造や偽嚢胞形成を伴いKIT染色陽性で、腺様嚢胞腺癌の診断を得た。このため左乳房温存術とセンチネルリンパ節生検を施行。最終診断は、腺様嚢胞腺癌で浸潤径3cm, リンパ節転移陰性, 核グレード1, 脈管侵襲は認めず, T2N0M0 StageIIAであり, ER(-), PgR(-), HER2+1であった。乳腺腺様嚢胞腺癌は乳癌全体の0.03-0.2%と稀な腫瘍であり, リンパ節, 遠隔転移がほとんどない, 予後は良好な低悪性度の腫瘍である。今回我々は腺様嚢胞腺癌の1例を経験したので報告する。

## 2. 乳癌放射線治療に伴う Bronchiolitis Obliterans with Organizing Pneumonia の2例について

松江赤十字病院初期研修医

向 菜津子

同 乳腺外科

曳野 肇, 村田 陽子

同 呼吸器内科

河崎 雄司

乳癌の放射線治療後の肺合併症として, Bronchiolitis Obliterans with Organizing Pneumonia (BOOP) を

発症することが報告されている。当院でのBOOP2例に対し, 文献的考察を加え報告する。

【症例1】60歳代女性。左乳癌に対し乳房部分切除術, センチネルリンパ節生検後に内分泌治療と放射線照射を行った。術後1年目の胸部CTで照射野に一致しない浸潤影を認めBOOPと診断, 内分泌療法を中止しプレドニン内服を開始した。陰影は早期に軽快したが, 内分泌療法再開後に再燃しプレドニンを再投与した。

【症例2】50歳代女性。左乳癌に対し胸筋温存乳房切除術を行った。術後3年目に前胸部皮膚に局所再発を認め, その切除後, 前胸部に放射線照射を行った。その5ヶ月後, 胸部CTに照射野に一致しない浸潤影を認めBOOPと診断, プレドニン内服を開始した。現在外来フォロー中である。

## 3. センチネルリンパ節生検の現状

独立行政法人国立病院機構浜田医療センター外科

高橋 節, 尾崎 知博, 永井 聡  
栗栖 泰郎, 岩永 幸夫

乳癌手術における腋窩リンパ節郭清省略にむけて, 当院におけるセンチネルリンパ節生検 (以下SLNB (色素法)) の現状を検討した。対象は当院でback up郭清を伴うSLNBを行った乳癌患者28例。SLNBはindocyanine green IVを使用しておこなった。センチネルリンパ節 (以下SLN) 同定率は89.2%。T1N0症例でのSLN同定率92.9%。N0症例でのSLN同定率94.7%。SLN偽陰性率: 0%。SLN郭清個数平均1.92個。SLN転移陽性: 28%。

SLN陰性例に対し腋窩リンパ節郭清省略を行うには, SLNの同定率95%以上, 偽陰性率5%未満がひとつの基準といわれている。色素法によるSLNの同定率は習熟期間が必要と報告されているが, 今後も症例をかさね, 症例を選択すればSLN陰性例に対し腋窩リンパ節郭清省略も導入が可能であると考えられる。

#### 4. 乳癌術後のリンパ浮腫に対する複合理学療法の効果に関する研究

松江生協病院外科

内田 正昭, 橘 球, 槇野 好成

山口 恵実, 佐藤 崇, 山本 佳生

同 看護師

原 修治

鳥取大学医学部大学院病態検査学

廣岡 保明

【はじめに】乳癌術後や放射線治療の患者に発生する上肢のリンパ浮腫に対して、保存的理学療法が取り込まれ、その有用性が報告されている。今回われわれは、保存的理学療法を実践し、その効果に関する研究に取り組み、浮腫の改善度合い、及びその過程でリンパ浮腫で悩む患者の思いをまとめ検討したので報告する。

【方法及び対象】理学療法を実践し、患肢腫脹の絶対値の変化、及び患者の思いについて KJ 法による質的、帰納的分析を行った。対象はリンパ浮腫と診断され、理学療法の依頼があった患者 5 名、リンパ浮腫の発症が予測され予防として関わった患者 3 名。

【結果及びまとめ】リンパ浮腫がある 5 名共浮腫の減少がみとめられた。予防的関わりの 3 名は浮腫の発症は認められなかった。患者の思いの分析では、初期には不安等の心の問題であったが、関わることで安心感やセルフケアの相談へと変化してきた。

#### 5. 当院における乳がん術後、続発性リンパ浮腫に対する取り組み

松江赤十字病院リハビリテーション科

井上 祐介, 田村 邦彦

同 乳腺外科

村田 陽子, 曳野 肇

【はじめに】乳癌術後続発性リンパ浮腫は、発症すると完治困難疾患で、予防と早期治療が重要である。当院では乳癌術後リンパ浮腫に対して複合理学療法に基づいたセルフケアの指導を行っている。複合理学療法は、スキンケア・リンパドレナージ・圧迫療法・圧迫下での運動療法・日常生活指導を基本とした保存的療法である。

【方法】当院に乳癌術後続発性リンパ浮腫を発症され、外来通院された患者様 29 名を浮腫の進行度に分類し (Stage I : 19 名 Stage II : 10 名 通院頻度 : 週 1 回 平均通院回数 : 4.4 回), 上肢の周径を測定し比較・検討を行った。

【結果】前腕部は Stage I : 1.69 cm Stage II : 1.0 cm 改善し, 上腕部は Stage I : 2.29 cm Stage II : 1.16

cm の改善が見られた。圧迫療法を開始してから両 Stage とともに周径に急激な減少が見られた。浮腫が進行していない Stage I がより改善度が高かった。

【考察・まとめ】乳がん術後のリンパ浮腫は早期発見・予防と治療が重要である。退院時の患者指導を実施し、リンパ浮腫に対する正確な知識を提供する必要がある、チーム医療で対応する必要があると考えられる。

#### 6. 針生検にて診断し経過観察のみで軽快した肉芽腫性乳腺炎の 1 例

島根県立中央病院外科

久保田豊成, 武田 啓志, 高村 通生

青木 恵子, 田邊 和孝, 影山 詔一

杉本 真一, 小川 晃平, 徳家 敦夫

同 乳腺科

橋本 幸直

肉芽腫性乳腺炎は、乳腺に腫瘍を形成する炎症性病変で、比較的稀な良性疾患である。乳癌と似た臨床像を示すため、乳癌との鑑別診断が重要である。今回我々は針生検にて診断し経過観察のみで軽快した肉芽腫性乳腺炎の 1 例を経験したので多少の文献的考察を加えて報告する。症例は 40 歳代、女性。左乳房腫瘍を主訴に当科受診した。左乳房 AC 領域に境界不明瞭な径 3 cm 大の硬い腫瘍を触知した。同部位の穿刺吸引細胞診、針生検でリンパ球・好中球などを主体とした炎症細胞浸潤を背景に、類上皮細胞やラングハンス巨細胞を伴った肉芽腫形成を認め、肉芽腫性乳腺炎と診断。マンモグラフィ・超音波検査・MRI で明らかに乳癌の合併を疑う所見を認めず、症状的にも結節以外、特になかったことより経過観察とした。初診から 9 ヶ月後の超音波検査で腫瘍の縮小を認め、現在約 17 ヶ月経過しているが再発・再燃なくさらに改善傾向にある。

#### 7. 最近経験した大腿骨骨転移症例の検討

松江生協病院外科

佐藤 崇, 槇野 好成, 橘 球

山口 恵実, 山本 佳生, 中島 裕一

小野田敏尚, 内田 正昭

【はじめに】骨は乳癌の転移しやすい臓器であり、脊椎や大腿骨への転移は病的骨折の可能性が高く、QOL を著しく低下させる。今回、大腿骨骨転移症例を 3 例経験したので、この予測 score と治療について考察する。

【症例】症例 1 は 56 歳の女性で胸壁浸潤を認める乳癌で多発性骨転移を認めた。症例 2 は 47 歳の女性で右乳癌術後で脊椎転移、多発肝転移の治療をうけていた。転倒に

て左大腿骨骨折をみとめ転移が発見された。症例3は44歳の女性で2003年両側乳癌にて手術を施行された。2007年右大腿骨骨転移にて放射線治療施行。2008年同部の体動時痛が出現した。症例1と3は左大腿骨骨幹部に混合性骨転移を認め体動時痛もあり、Mirelsの予測scoreでは8点であり、骨接合術を施行した。その後、歩行可能となり現在外来通されている。

症例2は骨接合術後を施行したが、一時的に歩行器での歩行が可能となったほどであった。

【考察】長幹骨転移に関して、切迫骨折の段階での手術がQOLも良く、病的骨折の予測としてMirelsのscoreがあり、9点以上では切迫状態であり予防的手術が望ましく、8点では固定が望ましいとしている。今回我々が経験した症例1と3はMirelsのscoreが8点であり骨接合術を施行し、体動時痛も軽減しQOLの改善が認められた。

【結語】大腿骨転移症例を3例経験し、治療方針を検討した。整形外科的治療の適応を考慮するうえで、病的骨折の予測スコアは有用であった。集学的治療を必要とするため、他科と連携し治療方針をたてる必要があると考える。

#### 8. 乳房下溝線部脂肪筋膜弁を用いて一期的再建を施行した乳房温存手術の1例

島根大学医学部消化器総合外科

百留 美樹, 板倉 正幸, 三成 善光  
西 健, 百留 亮治, 久長 恒洋  
山本 徹, 比良 英司, 上田 修平  
田中 恒夫

同 附属病院病理部

丸山理留敬

乳腺の授動や側胸部の脂肪織で欠損部を充填できるAC領域に比し、BD領域の整容性は一般に不良である。術後の変形をきたすと予想されたBD領域の症例に対し、乳房下溝線部脂肪筋膜弁を用いた再建を経験したので報告する。症例は45歳女性。検診で右B領域に1.6cm大の腫瘤を指摘され前医で経過観察されていた。新たにBD領域に1.2cm大の腫瘤を自覚し、当科紹介受診。B領域の腫瘤はFNAでclassIV。CNBでは良悪性の断定困難であった。BD領域の腫瘤はclassVであった。手術は乳房下溝線に沿った皮膚切開を行い、乳房部分切除術を施行。乳房下溝線より尾側の皮下を舌状に剥離し、腹直筋前鞘を皮下脂肪につけるように腹直筋から剥離して脂肪筋膜弁を作成し、これを翻転して乳腺切除部位に充填した。本術式により、簡便で温存乳房の整容性を得

ることが可能である。

#### 9. リンパ浮腫への取り組み ～リンパ浮腫講習会を開催して～

松江赤十字病院消化器外科乳腺外科病棟看護師

畑 美智子, 福岡佐智子, 金津 悦子  
鳥田 志乃, 坂根真由紀, 大木 寛子  
脇田 和子

同 医療社会事業部

奥 公明, 杉原 朗子

同 リハビリテーション科

井上 祐介

同 乳腺外科

曳野 肇, 村田 陽子

【はじめに】当院では腋窩リンパ節郭清をした患者30%にリンパ浮腫が発生している。リンパ浮腫の発生予防、悪化を防ぐためには患者自身が自己にて観察し、ケアしていくことが重要となる。今回リンパ浮腫講習会を開催し病棟での取り組みについて検討したので報告する。

【方法】①リンパ浮腫講習会開催。(患者さん対象, 医療従事者を対象) 患者さん対象の講習会直後にアンケートを施行した。②病棟での取り組みの見直し

【結果】講習会のアンケート結果より、リンパ浮腫発生機序の説明、繰り返しの説明が必要であることが分かった。現在行っている取り組みとしては①パスに指導を組み込み、パンフレットを用いて指導(「手術を受ける方のために」)②上肢周径の測定・記録③PTによる手動的リンパドレナージを行っている。更に指導を充実させるためには看護師の知識の向上、患者指導の見直し、チーム医療の充実の3点が必要であることが分かった。

#### 10. 乳がん化学療法における悪心・嘔吐対策に関する調査

島根大学医学部附属病院薬剤部

福岡 宏, 吉田 理恵, 玉木 宏樹  
上村 智哉, 西村 信弘, 平野 栄作  
直良 浩司

同 乳腺・内分泌外科

板倉 正幸

【目的】乳がん化学療法においては、治療ガイドライン(GL)において催吐性レベルが高度リスク(90%超)に分類されるEC療法等が繁用されている。そこで、薬剤師の関与についての検討を目的として、当院において化学療法が施行された患者について、悪心・嘔吐対策等の実態を調査し、GLと比較した。

【方法】平成19年度に、抗がん剤が投与された乳がん患者を対象として、化学療法及び支持療法の内容、悪心・嘔吐の出現状況を調査した。

【結果・考察】GLで催吐性レベルが高度リスクに分類されるレジメンの施行は約3割あった。急性嘔吐対策は、各GLで推奨されている5-HT<sub>3</sub>拮抗剤及びステロイド剤が全例に処方されていた。一方、遅延性嘔吐に対しては支持療法未処方例、処方量不足例もあった。カルテの記載では、かなりの症例に悪心・嘔吐の記載があった。以上より、薬剤師による入院化学療法患者に対するレジメンチェック及び副作用モニター、処方設計の提案等を開始した。

## 11. ステレオガイド下マンモトーム生検の経験

松江生協病院外科

榎野 好成, 佐藤 崇, 小野田敏尚

中島 裕一, 益永 礼子, 山本 佳生

山口 恵実, 橘 球, 内田 正昭

同 放射線科

和田裕美子, 菊川 淳子, 大林 紀子

【目的】外科で行った腹臥位式ステレオガイド下マンモトーム生検25例の経験と結果について検討した。

【対象】MMG カテゴリー3 : 18例, 4 : 6例, 5 : 1例 (計25例, 院外紹介6例24%)

【結果】標本石灰化採取率 ; 96%, 乳癌5例 (20%), 異型病変4例 (16%, C3 ; 3, C4 ; 1例)。乳癌カテゴリー別内訳はC4 ; 4例 (67%), C5 ; 1例 (100%)。

【考察】目的とした石灰化病変はほぼ確実に採取が可能だった。マンモトーム生検25例中、乳癌は5例 (20%)で、やや低率であり、C3症例の陽性率が低いことが原因と考えられる。今後はカテゴリー3症例のマンモトーム生検適応やC3, 4での偽陰性の可能性など症例を積み重ねる上での課題と考えられた。